

◇特集〈広島／ヒロシマ〉をめぐる文化運動再考

《研究会評》

# 合同研究会の経緯と成果

鳥羽 耕史

この合同研究会の起源は、道場親信「倉庫の精神史」(『未来』二〇〇五年一月〜二〇〇七年三月不定期連載、全七回)にある。未完に終わったこの連載で、道場は上野英信の周辺を深く探求し、その調査の過程で坂口博との交流が始まった。この出会いからはじまった、坂口らの第三期『サークル村』を基盤とする筑豊・川筋読書会と、道場らの東京南部をフィールドとする文化工作研究会の交流、そして双方からの人脈のつながりが、これまで三回の合同研究会となったのである。

第一回は筑豊・南部合同研究会として、二〇〇八年六月二日、青山学院大学青山キャンパスで開催された。まず九州側から茶園梨加「水巻町の文化運動」、坂口博「戦後筑豊文化運動史」という地域を絞った密度の濃い報告がなされ、それに北海道の水溜真由美が「炭鉱からみる——文化運動の位相」というコメントを行った。続いて東京側から道場親信「東京南部から——サークル研究をどのように接続・拡大するか」という報告と、池上善彦「版画運動から見えてくるもの」というコメントがなされた。その後既にサークルに関わる何らかの研究を始めていた二十数名の参加

者による総合討論が行われた。小会議室の空間で、その後についていく研究会の基盤を作るような議論がなされたのが初回の研究会であった。

第二回は同年一月二二〜二三日、九州大学六本松キャンパスで開催された。公開シンポジウム「福岡の戦後文化運動とその拡がり——大西巨人展にちなんで——」と題され、第二回筑豊・南部合同研究会という名前も付されたこの会合は、戦後文化運動合同研究会主催、福岡市文学館共催とされた。前回の議論を踏まえ、筑豊・南部に止まらない全国の戦後文化運動を調査・研究するということで集った研究者たちの議論の場と、この時期に当地で開催されていた大西巨人展と運動して一般市民にも開かれたシンポジウムの場とを両立させようとする試みであった。

初日は、茶園梨加『月刊たかまつ』を中心とした日炭高松サークル運動、ジャスティン・ジェステイ「千田梅二と版画運動」の二報告に上野朱がコメント、三嶽公子「中村きい子と「原点」(無名通信)」の報告に井上洋子がコメントした。それぞれのコメントの後に討議がなされ、さらに夕方より上野英信旧居跡をハイライトとする六本松キャンパス周辺の「文学散歩」が上野朱らのガイドにより行われる充実した内容だった。

二日は竹内栄美子「大西巨人と戦後文化運動」、李文茹「牛島春子の福岡での「新日文」系の活動について」の二報告に鳥羽耕史がコメント、友常勉「北関東芸術研究会について」、水溜真由美「炭鉱における文化サークル運動」の二報告に道場親信がコメントし、その後総合討論が行われた。筑豊・南部合同研究会から戦後文化運動合同研究会へという名称の移行に伴うように、東

京南部に関する報告はなく、当地の九州に加えて北関東や北海道でのサークルの問題が報告され議論された。縦長の教室に一般の来聴者も交えてのシンポジウムという形態が十分に機能したとは言いが難かったが、前回ともかなり重なる二十数名のコアなメンバーによる議論はかなり深められた。福岡市文学館と福岡市総合図書館の二会場を用いての大西巨人展の充実ぶりも記憶されるべきものとなっていた。

そして今回は二〇〇九年八月二九〜三〇日、第三回戦後文化運動合同研究会と第二八回原爆文学研究会の合同研究会として、「〈広島／ヒロシマ〉をめぐる文化運動再考——「つながり」と想像力の軌跡——」と題され、広島大学東千田キャンパスにて開催された。「合同」の意味が筑豊・南部から戦後文化運動へと拡張され、さらに原爆文学へと接続された地点で今回の研究会ははじめられた。

今回の初日には、司会の川口隆行と道場親信による開催経緯説明と問題提起があり、道場は「資料 1945—55 広島の文化運動に関するメモ」を提示して見取り図を示した。続いて参加者の自己紹介の後、最初の報告は水島裕雅「峠三吉と「われらの詩の会」で、宇野田尚哉がコメントした。水島の報告は広島県の代表的なサークル誌『われらの詩』の輪郭を示し、収録詩をテーマ別に分類したり、メンバーの男女比や詩と詩論の収録数などを分析したりした後、この雑誌の抵抗精神、継続、相互批評と自己批判、柔軟さと若さといった点に重要性を見出すものであった。宇野田は近年のサークル誌研究や復刻の動向を概観した後、彼が研究してきた『ヂンダレ』との対比で『われらの詩』の特徴を分析

するコメントを行い、さらに次の復刻版刊行へ向けて『われらの詩』研究会の結成を提唱した。討議では、戦時下の新生活運動や日本浪曼派などとの連続性や、拠点となった翠町みどりまちという場所についてなどの意見が交わされた。

二番目の報告は竹内栄美子「山代巴の文学／運動」で、松本麻里がコメントした。筑豊・川筋読書会の起源とも言える花田俊典、吉見俊哉と共に、花田氏急逝の十日前に開かれた日本近代文学会で発表した竹内は、そのシンポジウムでの問題意識を継承するものとして今回の報告を行った。竹内は山代と松田解子との往復書簡を主なテキストに、一九五〇年代女性運動への批判や、L'volveの戦略を見出した。松本のコメントは谷川雁や中井正一との関係を通じて山代の立ち位置を確認し、リブやフェミニズムへ連続するものとしての再検討を促すものであった。

三番目の報告は楠田剛士「山田かんとサークル誌」で、坂口博がコメントした。長崎で被爆した山田か人はサークル誌『芽たち』に参加し、詩人・批評家として活躍した。楠田の発表は山田を軸に『芽たち』における労働者による原爆表現や、その後の展開までを丹念に追うものとなった。坂口のコメントはさらに精緻に山田の軌跡を跡づけた。討議では山田による永井隆批判を原水禁運動との関係で捉え直すべきだとか、一九四七年の戦災都市連盟では姫路などと同じ戦災のカテゴリーだったのが、原水禁運動に伴って「原爆文学」が固定化されていった問題などが議論された。

二日目、四番目は岡村幸宣「原爆の図」全国巡回展の軌跡」、五番目は小沢節子「体験者の表現と運動のあいだ——丸木スマ(1875〜1956)、大道あや(1909〜)の「絵画世界」を中

心に——」の報告で、山本唯人と波瀾剛がコメントした。岡村は一九五〇年代に全国を巡回した「原爆の図」展を詳細な年表にまとめた上でプロジェクターの日本地図上に示し、保存よりもその時点での効果を重視して展示されたこの絵の受容について考察した。小沢は丸木位里の母であるスマと妹であるあやの絵などをプロジェクターで映写した後、あやによる「原爆の絵」の試みと失敗を取材したテレビ番組を紹介した。そこから読み取られるのはトラウマの問題と、死者の体験の表象不可能性である。山本は「表象が立ち上がる（場）を見つめる——丸木スマ・大道あや・「原爆の図」全国巡回展をめぐって」と題したコメントで、相互批評的なものとして二報告を捉え、戦争の記憶が定型化される以前の表現について考察した。波瀾は「原爆の図」が「絵」でなく「図」であることの意味、複製や写真パネルなどの位置づけについてコメントした。

六番目は道場親信「「原爆を許すまじ」と東京南部——50年代サークル運動の大衆化と極大化のシーン——」、七番目は東琢磨「広島市街区とうた・詩・演劇」の報告で、小田智敏がコメントした。道場は「原爆を許すまじ」の誕生経緯を述べた後、広島での受容、絵の会も含めた諸運動の相乗効果、そして衰退へと向かった流れを追い、豊富な資料紹介と共に考察した。東は当初は『ヒロシマ幻視行』として構想していたという著書『ヒロシマ独立論』から広がる空間の意味づけの問題や、広島で「ヒロシマ」

を語る困難について述べた後、小倉豊文、原民喜、大田洋子ら被爆当事者の文学における空間の問題について議論した。小田は敢えてこれらの報告から距離を取り、「いま広島で最も熱い歌」という「オバマジヨリティー音頭」を紹介し、林光の無伴奏合唱曲「原爆小景」を対置してその政治的布置を問題提起してみせた。包括討議では、何をもって体験者・当事者とするか、巡回展をめぐる政治的・空間的問題、うたをめぐる文脈の問題などが議論された。道場親信と川口隆行による司会は、時間超過に寛容であったためやや遅れの目立つ進行となったが、その分充実した議論ができたように思う。

「合同」する主体を様々に組み換えながら継続してきたこの研究会にあつて、今回は人数、空間、時間とも、濃密な議論ができるぎりぎりの大きさでうまくバランスが取られていた。三回共に東京、福岡、広島という都市の中心部にあるキャンパスで研究会が開かれ、様々な意味での交通に開かれてあつたことも重要なポイントであろう。今後の継続と運営においても、今回の成功は一つのモデルとなり得るものである。これまでこの研究会の周辺から『サークル村』『デンダレ・カリオン』『東京南部サークル雑誌集成』の復刻版や『谷川雁セレクトション』などが生まれ、サークル誌の保存や研究の必要性が広く認知されるようになってきた。この流れを受けて、『われらの詩』などのプロジェクトも順調に進むことを念じつつ稿を結びたい。(文中敬称略)